

鉢物用ガーベラの栽培

東京都大島農業試験地

浜 田 豊

1. はじめに

最近、急激に生産量が増加した鉢物用ガーベラ（ポットガーベラ）の栽培法と育種について説明を加えたいと思う。

ポットガーベラは、80年代に入ってから、急に、欧米でも人気上昇してきた鉢物である。特に興味深いのは、わが国の種苗会社はその火つけ役を果たしてきたことである。

現在のガーベラはその基本原種発見以来ほぼ100年の歳月をかけて育成された大輪系のガーベラがその中心となっている。坂田種苗はこれら欧米の実生系品種から特性の鉢物向きの品種（系統）を作り、昭和52年国内市場に売り出した。つづいて昭和56年からは国際市場に「ハピポット」「Happipot」の名前で売り出すや人気急上昇して、今日ではこれらの系統に更に選抜が加えられ、ラインダンス、パレード、フロリポットなどの実生系の品種（系統）が各社から生まれている。

2. 主な品種の特徴と開花習性

第1表は、西ドイツ、ハイデルベルヒ園芸試験場で調査したポットガーベラの特性表である。いずれの品種とも実生系であるため、草姿、花色に幅がみられる。鉢物用としては4号鉢で30cm以下の草丈が望まれる。すなわち、8割以上が30cm以下の草丈となる品種としては、ハピポット、ライラ、鉢物用50号があり、いずれも赤系の比率の高い品種である。

第2表は、東京農試での成績である。一番花が咲いた

時の展開葉数はハピポットでは平均13.8葉、ラインダンスでは平均14.5葉。いずれの品種とも10～15葉の頻度が最も高かった。なおこの時点には可視的花蕾数が24～3あり、レファリング女史の着花模式図（図1）からするとすでに分枝が進んでいることになる。おのおの品種で平均1.5～1.9本（主枝も含む）の分枝が認められ、分枝節位は頂花に近い高節位（止め葉から3.3～3.2節）に集中していた。このことは開花期が揃いやすいことを意味している。

3. ポットガーベラの栽培法

a. 種子の寿命

ガーベラの種子の寿命は極めて短い。私たちの経験でも、採種後半年間室温で放置しておいた種子が全く発芽しなかったことがある。

購入種子は防湿袋を開封したらすみやかに播かなければなりません。自家採種した場合でも褐変した種子をとり播きするのが発芽が揃い良い結果を得ている。

b. 播種と用土

播種用土としては、有機質に富んだ物理性の良い土を土壌消毒（蒸気消毒、MB剤）して使う。有機質素材としてピートモスの混入量が多い場合は消石灰等で土壌酸度を6～6.5にきょう正する必要がある。

一般的には、育苗箱に清潔な播種用土もしくはピートパンを入れ、条播し、かるく覆土すればよい。播種後は、ヒートベンチ（温床線湯湯で床の加温が可能なベンチ）で床温を20℃、気温を20～25℃で乾きに注意しながら

第1表 主なポットガーベラの特徴（ハイデルベルヒ園試 1984）

品 種 ・ 系 統 名	発芽率 (%)	花 色 の 分 布 (%)					花 径 cm	草 丈 (cm) の 分 布 (%)			1000鉢当りの栽培面積
		赤系	ピンク系	黄色系	白系	覆色		25cm以下	25-30cm	30cm以上	
1. ライラ Leila	80	63	20	15	0	2	9.8	65	20	15	50m ²
2. ハピポット Happipot	81	65	12	20	0	3	9.8	20	40	40	48
3. フロリポット (Walz) Floripot	85	71	17	3	3	3	9.5	55	30	15	53
4. パレード Parade	—	48	28	19	0	5	9.5	5	45	50	50
5. フロイリー Fleurie	71	53	27	20	0	0	9.9	45	35	20	53
6. 鉢物用49号 (Zwaan Pannevis)	83	43	45	5	3	4	10.0	35	30	30	53
7. " 50号(赤系)	81	94	0	0	0	6	9.1	75	10	15	48
8. " 51号(ピンク系)	73	9	77	0	0	14	11.5	45	25	30	63
9. " 52号(黄色系)	80	3	11	66	18	2	10.5	70	10	20	59
10. フロイリー 赤系	80	100	0	0	0	0	8.8	50	11	39	53
11. " ピンク	58	8	92	0	0	0	10.0	60	10	30	50
12. " イエロー	51	0	0	100	0	0	9.4	40	35	25	53

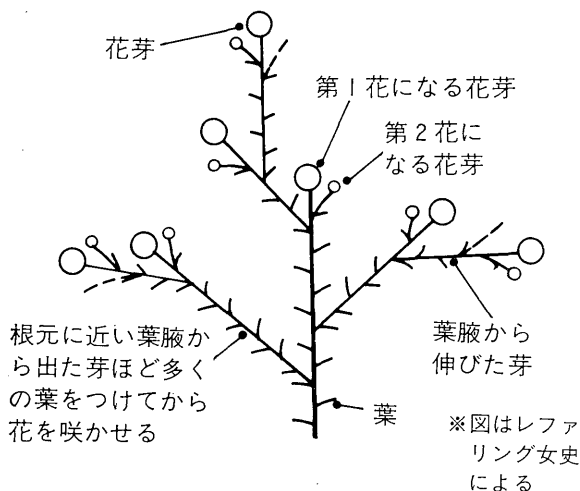
第2表 ポットガーベラの開花習性

品 種 名	調査個体数	展開葉数	可視的 花蕾数	分枝数	止め葉から の分枝位置
ハビポット	83	13.8±3.7	2.4±1.4	1.5±0.9	3.3±2.8
ラインダンス	58	14.5±4.2	3.0±1.7	1.9±0.9	3.2±2.9

ら管理する。このような好適な条件下では6～10日で発芽する。発芽後は次第に強い光にならしながら徒長させないように管理する。

第1図 ガーベラの花芽形成の模式図

花のつき方(茎の部分拡大したもの)



c. 移 植

播種後、3～4週間もすると本葉が2枚になるので、育苗鉢(ジフィーストリップスなど)に移植する。さらに5～6週間後に、本葉が4～5枚になった時に仕上げ鉢(4～5号)に植付けます。この時の用土もちろん完全に土壤消毒された排水性の良い用土を選びます。なお、切花用ガーベラ同様浅植えとし、深植えは避けます。

施肥はクミアイ液肥2号とリン安液肥を組み合わせる週単位300～500倍で与えます。またコーティング肥料を基肥として5～8g/用土1ℓ(ロング又はハイコントロール肥料)施し追肥を省略することもできます。

d. 鉢上げ後の管理

図1の模式図どおりの花芽の形成には、充分な光と温度が必要です。すなわち、強い光のもとでは、葉腋からの分枝も旺盛で、それぞれの頂端に花をつけるが、弱い光のものでは花芽のラベーション(発育途中での座死)が起こる。北ヨーロッパなどの国々では、光の絶対量の少ない冬期に起こしやすい。また弱光下で、湿度が高い場合は、この傾向は促進され、低温下では抑制される。

したがって、一般的には、鉢上げ後、充分な強い光が当たり、通気性のよい栽培棚(ベンチ)を利用し、18～

21℃(夜温)(昼温は25℃位)で管理し、花芽が形成されてからは低めの気温(12～18℃)で管理する。冬期には最低10℃位まで下げてもよい。

夏季の生産では、光の量は充分あるが、高温となるため、少くとも30℃以上を越えないよう強制換気、遮光で気温を下げなければならない。

e. 到花日数

ガーベラの花芽形成には月長はあまり影響しないため、播種期を変えることによって周年生産が可能です。したがって到花日数は気温の変動、即ち栽培時期により変わる。

一般的には、鉢上げ後の到花日数(栽培期間)は夏期では少くも3カ月、平均4カ月、冬期には若干のびて5～6カ月かかります。

f. 灌水管理と施肥

ガーベラは播種後の栄養生長期には多くの土壌水分が必要である。播種から最終鉢上げ後1カ月まではやや多めの灌水が必要である(灌水点PF 1.7～2.0)。この期間はとくに乾きに注意が必要である。その後、生殖生長期に移ってからはやや控えめとし(灌水点をPF 2.0～2.3)、過度の灌水はさける。

水質は他の園芸植物同様良くなければならないし、冷めたすぎる水は避けなければならない。

施肥量は、施肥法によって異なるが、液体肥料の場合、灌水ごとにN濃度で、100～200ppm程度与えるが、7～10日おきでは200～400ppm程度与えるとよい。また最近では元肥として緩効性肥料、例えばオスモコート(14—14—14)、ロング、又はハイコントロール肥料(100～180日タイプなど)を用土1ℓ当り5g前後施すことによって追肥を省くこともできる。

また、ガーベラは微量要素のマンガン、鉄、ホウ素などの欠乏に敏感なため、微量要素補給剤(例えばマルチケミン®)の葉面散布ないし、土壤施用することによって品質の向上につながる。

g. 徒長防止

前にも述べたように、ガーベラの鉢物生産では、充分な光の強さ(5—7万Lux以上)が必要である。したがって、株が混み合っていたり、曇天が続いた場合には、徒長気味となるため矮化剤等で徒長を抑えなければならない。欧米における試験の結果ではB—9(Alar) 0.5%の葉面散布もしくは、スリトーン(A—Rest) 0.125～0.25mg/15cm鉢の土壤灌注が効果あると報告されている。

4. 主な病害虫の防除

切花用ガーベラ同様、鉢花生産でも、病害虫の発生は品質を著しく低下させる。詳細については、「農業と科学」(5月号P 5～6)を参照してほしい。